

注意

印刷通販「すぐスール」の経験から 製本と余白とページ数の違い



製本には大きく分けて「中とじ製本」と「無線とじ製本」があります。
それ以外でも「平とじ製本」と言うものがありますが、近年はあまり使用されません。
「中とじ製本」は真ん中部分をホチキスで留めた物で一般的な週刊誌などに使われている製本形式で、
「無線とじ製本」は一般書籍などで良く使われる製本形式です。(図参照)

■無線とじ製本の注意点

一番重要なのはノド部分（見開きにした時の真ん中部分）の扱いです。

無線とじ製本は背中を少し削り、糊を染み込ませ表紙を巻きまします。この結果、見開きセンターから左右それぞれ7mmは見えなくなり、4mm位は完全に糊で固まるので100%見えなくなります。

以外とノドが意識されずに作られたデータが多いのです。

通販ではそういったデータが入稿される事が多く、その際はデータ全体を小口側（見開きの端側）に左右振り分けて「のど」部分を作ったり、微妙に変倍をかけてさらに小口側に振り分けたりします。（お客様はそういった操作がされている事におそらく気付いていないと思います）

「無線とじ製本」で冊子などを作る際には周りの余白を最低でも10mmは確保する事が見やすさ、読みやすさにつながります。一般的には無線とじ冊子の場合、周囲の余白を15～30mmぐらいに設定します。また、左右ページにまたがる写真の扱いは避けた方が良いでしょう。

ページ数にもよりますが背文字を入れる事が出来るのが特徴です。



無線綴じ製本は、下のように180度開きません。
また、見開き中央付近は、隠れて見えにくくなります。



この中央部分が隠れます
左右各7mm位

■中とじ製本の注意点

中とじの場合、多くはパンフレットやページ数の少ない冊子で使用する事が多いです。

中とじ製本で困るのは、一枚の用紙で4ページになる事が忘れられて「18ページで中とじ」や「22ページで中とじ」を依頼してくるお客様が多い事です。当然2ページ分の半端があるのでセンターでホチキス留めが出来ません。その際は、お客様に連絡して白紙ページを2ページ割り当てるとして処理する事になります。また、過不足を告げると「無線とじに変更して下さい」と製本方法を変える方もいます。

中とじの場合見開きを意識した作りが多いのも特徴です。写真が左右ぶち抜きになっていたり、見出しが左右ページにまたがっていたりします。しかし、いくら真ん中まで見えても、小さな文字が左右ページにまたがると危険です。製本工程などで若干のズレが生じる事があるので小さな文字の場合、読めなくなる事があるのです。（ど真ん中のページだけはズレる事はありませんが、意外とプロのデザイナーでもそういったレイアウトをされる方がいます）

見開きで作るデータ上だけで判断し、仕上がりの誤差分が意識されていない結果だと思えます。

中とじの場合は背文字が入れることができません。（中とじ表紙に背文字を入れてきたお客様もいますが、説明して削除していただきました。）

以上、製本形式にあったデータを作りましょう。

(デジタル印刷課 風帆)

